

『正理一滴論注』におけるダルモータラの認識論
(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D196813
氏名：繆 寿楽

論文の要旨

ふりがな 氏名	ぼく じゅらく 繆 寿楽
論文題目	『正理一滴論注』におけるダルモータラの認識論
論文の目的と方法 <p>インドでグプタ王朝（330–550）のもと古典文化が花開いた時期に登場したディグナーガ（480–540）は、仏教内外の様々な論理思想を批判的に検討し、この世に真に存在するものを正しく捉える認識手段を考察して、「仏教論理学」と呼ばれる新たな学統を創設した。ダルマキールティ（600–660）は、ディグナーガの思想体系を整理し大きく発展させたことで知られる大思想家である。これまで、このディグナーガとダルマキールティを中心に据えた研究が多く積み重ねられてきた。後者の研究の初期には彼の『正理一滴論』が重視された。近年、当作品の注釈書『正理一滴論注』を著したことで知られるダルモータラ（740–800）が正しい認識手段の定義などに対して与えた影響の大きさが認知され始めている。一方、彼が残した著作のうち、『正理一滴論注』の重要性は十分に認識されておらず、同書に描き出される彼の思想を体系的に検討しようとする試みは未だなされていない。本論文の目的は、『正理一滴論注』で展開されるダルモータラの議論に目を向け、それを先代の思想と比較しながら、彼の解釈の特色やその思想史上の意義を考究することである。</p> <p>本論文では以下の研究方法をとる。そのほとんどがチベット語訳でしか現存しないダルモータラの著作の中で、サンスクリット原典の全体が現存する『正理一滴論注』は仏教思想研究にとって第一級の資料である。本書の注釈対象である『正理一滴論』は第一章「正しい認識手段」、第二章「自己のための推理」（正当な根拠による対象の認識）、第三章「他者のための推理」（論証式を用いた認識内容の提示）という三章から構成される。本論文では、これら三つの主題それぞれをめぐる重要概念に関してダルモータラの思想を考察することで、彼の思想の体系的な把握を目指す。</p>	
論文構成 <p>本論文は序論、本論、附論より構成される。本論は全三章及び結論から、附論は翻訳研究からなる。</p>	
序論 <p>序論では、ダルマキールティとダルモータラの基本情報の提示、仏教論理学における基本概念の説明、ダルモータラを研究対象とする先行研究の概観、研究の目的と方法の提示を行っている。</p>	
第一章 正しい認識手段	

本論第一章では、ダルモータラの視点から「目的実現」(arthakriyā)と認識手段の「欺かないこと」(avisamvādatva)という二つの概念を分析した。それに加え、彼の实在論に関連して、vastuという語が指示しうる諸概念を考察した。仏教論理学者は独自相(svalakṣaṇa 概念的規定を欠く、人の目的を実現できる实在)と共通相(sāmānyalakṣaṇa 個物間の共通性を根拠として、主観的な思惟作用により構想された姿)のそれぞれを対象とする知覚と推理を正しい認識手段として認めている。知覚は概念構想を離れて対象の姿をありのままにとらえるのに対し、推理は論理に基づいて対象の概念的な姿を推し量る。この二種の認識手段に基づいてのみ人の目的が実現されると彼らは考える。

第一節では、ダルモータラの「目的実現」理解の特徴を見出した。ダルマキールティは知覚と推理のいずれに関しても人が望む「目的実現」は「望まれるものの実現及び望まれないものの非実現」であると考え。ダルモータラはその実現・非実現を対象の獲得・放棄として解釈する。一方、ダルモータラによれば、推理に関して人は対象の獲得・放棄を望むが、知覚が生じる時点で人の目的は実現されるので、知覚に関しては、人は対象の獲得・放棄を望まない。この場合、人が望むのは知覚の生起だからである。対象の獲得・放棄は概念構想の参与を必要条件とするが、知覚は概念構想を離れるにもかかわらず、知覚に関して対象の獲得・放棄を望むのは合理的ではないと彼は考えたと思われる。

第二節では、正しい認識手段が欺かない理由を考察した。ダルマキールティによれば、知覚と推理に基づいて人の目的の実現は確定しているため、この両者は正しい認識手段である。一方、ダルモータラによれば、人は推理の後に行動しなければ対象を獲得できない。そして推理は人を強制的に行動させることができない。それゆえ、推理に基づいて対象の獲得・放棄という「目的実現」は確定しないと彼は考える。行動の対象を正しく示すことさえできるならば、知覚と推理は正しい認識手段として認められると彼は考える。このような違いはダルマキールティとダルモータラの「目的実現」理解の差異に起因する。

第三節では、『正理一滴論注』における vastu という語が指示しうる対象を明確にした。1. 独自相と共通相を持つもの、2. 勝義(paramārtha 究極的な対象＝対象の本来的なあり方)、3. 独自相＝勝義有(paramārthasat 本来的なあり方をもって存在するもの)である。それらのうち、1は世俗の水準で認められる存在である。世俗を超えた究極的な真理の点では、2と3こそが真に存在する実体である。ダルモータラは2と3を同じものと解している。勝義有と勝義を同一の範疇にくくり、それを vastu という語をもって指示可能とするのが彼に特徴的な考えかどうかははっきりしないが、彼の vastu 理解の下地は先行の学者たちの論説の中に十分に準備されていたと考えられる。

第二章 自己の為の推理

本論第二章では、まずダルモータラの「分別知」(vikalpa 概念的な認識)理解を考察した。彼によれば、例えば壺が認識されないことに基づいて、人が壺の非存在に関する諸活動(「壺は存在しない」という言語活動など)を推理する場合、壺は知覚可能なものでなければならない。この場合、壺の非認識(anupalabधि)が証因(hetu 推理の根拠の一つ)となる。続いて、

本章では彼の議論に現れる「知覚可能性」(dṛśyatva)の二重性を考察し、最後に、「知覚可能性」を如何に把握すべきなのかを明らかにした。

第一節では、ダルモッタラが「言葉と結合可能な顕現を有すること」というダルマキールティによる分別知の定義を別の形に言い換え、分別知を、近在しない対象の顕現を有する認識としていることを明らかにした。このような理解の妥当性を赤ん坊の認識、音声による分別知、ヨーガ行者の認識といった三つの特例において確認した。彼は特例にも適用できる、より検証しやすい定義を提出しようとしていると思われる。

第二節では、まず「知覚可能性」の二重性を明らかにした。1.「本質的な知覚可能性」は対象が誰にとっても観察可能であることを意図している。そして、2.「条件付きの知覚可能性」は、対象が実際に知覚されることに必要な全条件の存在または想定を意味する。ダルマキールティは非認識因を本質的に知覚可能な対象の非認識因とし、それが働く前提を認識条件の完備とする。そして認識条件には対象それ自体が含まれる。一方、論証時に対象(例えば壺)は存在しないから、非認識因が働く条件を満たせなくなる。それに対してダルモッタラは条件付きの知覚可能性を導入し、非認識因を、条件付きで知覚可能な対象の非認識因とする。彼は対象の存在を仮に想定して、非認識因を働かせるのである。この「知覚可能性」の二重性は、ダルマキールティの思想体系に現れる上記の問題点を解決するために考案されたものと思われる。

第三節では、対象の条件付きの知覚可能性を把握する方法を明らかにした。この知覚可能性を把握するためには、対象の知覚に必要な全条件の存在あるいは想定が必須である。このうち、条件の想定が必要な場合、それぞれの対象について異なる条件を想定する必要がある。例えば壺についてはその存在を想定するのに対して、本質的に知覚不可能な屍鬼についてはその存在と本質的な知覚可能性の両方を想定する。このような条件に関するダルモッタラの論述は、彼自身の非認識理論をより厳密なものへと練りあげる作業であると思われる。

第三章 他者の為の推理

本論第三章では、「自身の言葉によって退けられるもの」(svavacananirākṛta)に対するダルモッタラの理解の特徴及び彼が考える「疑似主張」(pakṣābhāsa)と「他の非主張」の違いを明らかにした。推理の結果を他者に提示する際に論証式が使われる。それは主張、証因、例という三要素から構成される。主張と似て非なるものが「疑似主張」と呼ばれ、「自身の言葉によって退けられるもの」は四種の「疑似主張」のうちの一つである。これら四種の「疑似主張」に分類されない間違った主張が「他の非主張」である。

第一節では、「自身の言葉によって退けられるもの」に対するダルモッタラの理解を闡明した。谷沢によれば、ダルマキールティは「自身の言葉によって退けられるもの」を自己矛盾する主張とし、ダルモッタラは同じ理解を示している。しかし実際にはそうではなく、ダルモッタラは「自身の言葉」を話者が以前に述べた言葉としている。彼は論者自身の以前の言葉によって退けられる論者自身の現在の主張を「自身の言葉によって退けられるもの」としている。

第二節では、「疑似主張」と「他の非主張」の違いを明示した。「疑似主張」は、所証(証

明されるべきもの) としてのみ論者によって望まれるものだが、知覚などによって退けられるものである。一方、「他の非主張」は知覚などによって退けられないが、1. 所証の役割だけを担うこと、2. 論者によって望まれることという二つの要素のうち、いずれかの条件を満たさないものである。「疑似主張」はある主張が述べられた段階で「疑似主張」として確定されるが、「他の非主張」は論証式全体を考察しなければ「他の非主張」として決定されない。

結論

結論では以下のことを指摘した。ダルモータラはダルマキールティの思想を着実に踏まえつつも、自身の理解に基づいて独自の考えを示し出している。ダルモータラはダルマキールティの単なる注釈者ではなく、インド哲学史を飾る一人の哲学者として評価されるべきである。

附論

附論では、『正理一滴論』と『正理一滴論注』の全体を扱う翻訳研究を提示している。